

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3590104182		
法人名	株式会社 セーピング		
事業所名	グループホーム 元町		
所在地	山口県下関市元町1-7		
自己評価作成日	令和 4年 1月 1日	評価結果市町受理日	令和4年7月11日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度ホームページで閲覧してください。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 やまぐち介護サービス評価調査ネットワーク		
所在地	山口県山口市吉敷下東3丁目1番1号 山口県総合保健会館内		
調査実施日	令和4年1月19日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

グループホーム元町の理念である「も」モットーは「と」共に寄り添い助け合い「ま」まあるい心で「ち」地域とつながるグループホーム元町をモットーに、理念に沿った支援を目指しています。入居者と職員が家族のように笑顔でまあるい心を持ち心地の良い場所となるよう支援しています。コロナ禍で外出が難しい中、「元町だより」やメール・電話・テレビ電話等を活用し家族とのコミュニケーションを図っています。施設内では、茶話会・海鮮丼やマクドナルドのテイクアウトの昼食などの工夫をしています。町内の大掃除に参加し、地域に根差したホームを目指しています。「ゆっくり」「一緒に」「楽しみながら」「のんびり」生活リハビリを行うことで入居者の能力を活用し、活き活きとした表情が見られるように自立支援を目的に支援しています。職員は法人全体研修やホーム内の研修に参加、働きながら学んでいます。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

職員は、利用者が毎日の暮らしの中に生きがいを持って暮らしていただけるように、利用者の好きなことや得意なこと、楽しみにされていること、希望されていることを会話を通して聞き出されて、支援しておられます。食事づくりでは、利用者が得意な調理やテイクアウトの昼食、郷土料理、保存食づくりなど、利用者が中心になって取り組まれています。利用者家族との信頼関係は強く、コロナ禍で面会が制限される中、電話やライン、メールなどを活用されて、細かな連絡や定期的な情報提供をされており、家族は安心して、気軽に意見や要望を伝えておられます。外出は家族の協力を得て、受診時を利用しての外出や外食をされ、ドライブでは海や公園、神社に出かけて車窓から景色を楽しまれ、車中からの初詣など、希望に添えるよう工夫をされています。防災訓練は利用者も参加され、非常食(カップ麺)の試食をされ、非常食の味にもなるように取り組んでおられます。管理者は何事も職員と情報を共有し常に同じ方向を向いておられます。職員は「フレディの遺言」にある「何事も相手の言うことを受け入れる」の言葉を胸に利用者一人ひとりに寄り添われ、「一日に1回は笑おうね」と話し合いながら笑顔でケアに取り組んでおられます。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～56で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
57 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	64 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
58 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	65 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
59 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
60 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員は、活き活きと働けている	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
63 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

## 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	開設時に作った施設理念を共用部に掲示し、職員会議、朝の申し送り時に唱和している。職場内研修にて理念についての研修(共有)を行い、職員全員で共有して理念の実践につなげている。新規職員にも理念の研修を行っている。	地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、事業所内に掲示し、毎朝の申し送り時と月1回の職員会議時には唱和して確認している。内部研修時に、理念について話し合っ共有し、職員は、管理者の「一日1回は笑おうね」の言葉を胸に利用者寄り添い、実践につなげている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍で難しいところではあるが、町内清掃等参加できることは参加している。	事業所は自治会に加入しており、自治会報や自治会長から地域での情報を得ている。利用者と職員は、自治会の清掃作業(歩道や周辺の草取り、清掃)に年2回、参加している。コロナ禍の為、利用者が参加できる行事は開催されていない。事業所便りは自治会長に渡しているが、地域の人に参加できる行事は実施していない。事業所では、地域の介護に関する相談場所として利用してほしいことを運営推進会議等を通して積極的に案内しており、開設当初には相談が多くあったが、コロナ禍の中現在はほとんど無い状況であり、PR方法の検討をしている。ボランティアにも待ってもらっている状況である。利用者は、事業所周辺の散歩時に会う地域の人と挨拶を交わし、コンビニの活用、ポストの利用、定期的に来訪の理美容院を利用して、コロナ禍の中でも地域の一員として日常的に交流できるように取り組んでいる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナ禍により、思うようには行えていないが、町内清掃等参加できることは参加している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
4	(3)	<p>○評価の意義の理解と活用                      運営者、管理者、職員は、自己評価の及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる。</p>	<p>職員会議にて外部評価の意義について説明するとともに、自己評価書類を全職員に配布し記入後取りまとめている。自己評価を記入することにより、ケアの振り返りを行い、介護サービスの質の向上を図ることが出来るように取り組んでいる。</p>	<p>管理者は、月1回の職員会議時に「自己評価項目の手引書」をもとに、自己評価の意義について説明し、自己評価をするための書類を非常勤職員を含め職員全員に配布し、記録後に1名の職員と一緒にまとめている。管理者は、前回の自己評価では、記録の書き方に関する質問が多かったが、今回は、スムーズに記録していると感じている。外部評価結果を受けて目標達成計画を立て、応急手当や緊急時の対応についてや熱中症、食中毒、感染症について内部研修を行い、応急手当や初期対応の定期的訓練(救命救急研修)について実践研修を実施するなど、評価を活かして、具体的な改善に取り組んでいる。</p>	
5	(4)	<p>○運営推進会議を活かした取り組み                      運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている</p>	<p>開設以来、コロナウィルス感染拡大防止のため、書面による会議(お知らせ等)のみになっている。</p>	<p>会議は2ヵ月に1回、コロナ禍の為、本人、家族、連合会会長、自治会長、民生児童委員、地域包括支援センター職員、同業者等のメンバーに、利用者の状況や活動状況、行事予定、ヒヤリハット、事故報告を文書で作成し、管理者が事業所便りと一緒に持参し、口頭で説明して直接意見をもらっている。メンバーからは、コロナ禍の中メンバー自身も外出がままならず、実際にグループホームがどのようなところかわからないことやコロナ禍での労いの言葉があり、事業所の広報についての検討をするなど、そこでの意見をサービス向上に活かしている。</p>	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○市町との連携 市町担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市の担当者とは直接出向いて、書類を提出し相談や情報交換を行っている。また電話でも相談を行い、協力関係を築いている。地域包括支援センター職員とは運営推進会議の議事録を持参したりしながら、連携を図っている。	市担当者とは、電話や直接出向いて情報交換や制度改正等の相談を行い、助言を得るなど協力関係を築くように取り組んでいる。地域包括支援センター職員とは、運営推進会議時や電話で利用者についての相談を行い、連携を図っている。	
7	(6)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員は職場内研修や身体的拘束適正化委員会にて学び、禁止の対象となる行為について理解して身体拘束をしないケアに取り組んでいる。新規職員にはマニュアルに基づいて研修を行い、理解している。玄関の施錠はしているが、外出傾向の強い入居者については職員が寄り添い、一緒に出掛けている。全職員で身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	事業所では「身体拘束等の適正化のための指針」をつくり、利用者と家族に同意を得ている。職員は指針を基に作成したマニュアルに添った内部研修(身体拘束と高齢者虐待、スピーチロック、ドラッグロック、フィジカルロック、権利擁護と高齢者虐待等)で学び、3か月毎に開催している「身体的拘束適正化検討委員会」の事例を通して学び、身体拘束や虐待の内容や弊害について、正しく理解している。玄関前が道路の為、玄関に施錠をしている。帰りたいという利用者や玄関近くに座っている利用者があれば、職員と一緒に外に出て空気を吸ったり、周辺を散歩して気分転換を図る他、身体を動かしたり、役割(ご飯を炊く、盛り付けなど)を持ってもらって、日中は身体をよく動かしてもらい、夜間はゆっくりと寝てもらうように働きかけて身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	
8		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待について研修を行い、日頃より利用者の身体、精神的な状態を十分に把握した上で異常や変化に注意し、申し送り時や職員会議を通じて、情報の共有化を図り、防止に努めている。		
9		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	全職員が制度の理解に努め、研修等に参加し、活用できるように支援に繋がりたいと考えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時、入居者の家族が十分に納得されるまで説明を行い、理解、納得を図っている。		
11	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等からの相談、苦情の受付体制や処理手続きを定め周知するとともに、意見や要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	相談、苦情の受付体制や処理手続きを定めて、契約時に家族に説明している。面会時に意見や要望を聞き、職員間で共有している。電話やメールでの相談にも応じている。	相談、苦情の受付窓口や外部受付機関を明記し、処理手続きを定めて、契約時に家族に説明をしている。コロナ禍の爲、現在、面会（必要最小限の面会）時や、電話（携帯、テレビ）やライン、メール、手紙等で家族からの意見や要望を聞いている。毎月、家族宛に事業所便りと利用者を担当している職員から、利用者の暮らしの状況と変化を記録したものを送付して意見が言いやすいように工夫している。意見は連絡ノートに記録して職員間で共有している。家族からは紙パンツの使用量についてや、これまで通り母親が笑顔で過ごしてほしいこと、介護への感謝の気持ち、コロナ禍での職員への労いが直接寄せられている。排泄支援でのパットや紙パンツの使用についての根拠等、分かり易い説明をするなど、意見を運営に反映させている。	
12	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者は申し送り時や日常の業務の中で職員の意見や提案を聞き、判断できない場合は代表者等に尋ね、問題を放置せず、解決するように努めている。	管理者は、毎朝の申し送り時や月1回の職員会議時に意見や提案を聞く他、委員会時、係業務（事業所便り、消耗品、行事等）の中でも聞いている。管理者の方から気軽に言葉をかけて話しやすい雰囲気づくりに努めており、運営方法や利用者の受け入れ、職員の交代等、常に職員に報告、相談をしている。職員からは、夜勤時には駐車場がもっと近くに欲しいことや他のグループホームを見学したいとの意見があり、早速、法人内のグループホームの体験研修を実施するなど、意見を運営に反映している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者を通し、職員個々の勤務状況の把握に努め、各自が向上心を持ち続けるよう、職場環境、条件の整備にあたっているが、給与水準の条件の整備には至っていない。有給休暇は取りやすくなっている。		
14	(9)	○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人全体研修は介護職場のマナー、コンプライアンス、企業理念、行動指針、個人情報保護等あり、全職員が会社貸与のスマートフォンで学習する。グループホーム内の研修は1年間のテーマを決め、資料を作成して職員会議の中で実施している。	外部研修は、職員に情報を伝えて本人の希望や段階に応じて勤務の一環として受講できるようにしている。今年度は認知症実践者研修に1名参加し、当事業所が実習施設であり、現在実習中である。法人全体研修は法人職員が講師となって、介護職場のマナーやコンプライアンス、企業理念等をスマートフォンで学習できるようになっている。内部研修は、管理者が年間計画を立て、講師となって、接遇マナーや応急処置方法、食中毒・感染症の予防対策、脱水症、熱中症対策、緊急時の対応、看取り、ノロウイルスとインフルエンザ、権利擁護と高齢者虐待、認知症について、プライバシー保護、個人情報の取り扱い、身体拘束と高齢者虐待等について、毎月、職員会議の中で実施している。新人職員は、法人研修終了後、日常業務の中で管理者や先輩職員から、介護の知識や技術を学んでいる。管理者は職員個々の研修受講記録を作成している。法人では職員一人ひとりにスマートフォンを貸与し、認知症や介護情報、フォーラム開催情報等、法人内外の情報を常に動画で配信していつでも学習できるように支援している。	
15		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍で、同業者との交流や勉強会等への参加は出来ていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
16		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所時に基本情報シートを家族に記入して頂き、情報収集を行い、サービス導入前に本人の心身の状態を把握している。本人の思いを傾聴し、気兼ねなく安心して生活できるように努めている。		
17		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族との話を十分に聴き、困っていること、不安なこと、要望等を聴き、事業所としてできることを伝えている。		
18		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	日常の生活動作、身体的・精神的健康、社会関係、経済状況、住生活環境などについて、本人と家族等の「その時」のニーズを的確に把握し、適切な支援ができるように努めている。		
19		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	暮らしを共にする同士として、本人のできることを、好きなことを見極め、本人の意思で生活できるように努めている。		
20		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍で面会は難しい状況ではあったが、面会時は一緒に過ごす時間を大切にしている。また、元町だよりを送る時には本人の日頃の様子を手紙や写真で伝え、家族と共に本人を支えていくように努めている。		
21	(10)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居者に年賀状を書いていただいたり、電話(テレビ電話含む)や手紙での交流を支援している。敬老の日や、母の日のお祝いが送られた時にはお礼状を書いて頂いたり、電話をしている。家族や親戚等の面会があり、ゆっくり居室で過ごして頂き、馴染みの人や場所との関係が途切れないように支援に努めている。	家族や親戚等最小限の面会や家族や親戚、友人に電話をかけたり、年賀状や礼状、手紙を出す支援をしている。定期的来訪によって馴染みとなった理美容院の利用や馴染みのコンビニでの買物、ドライブで馴染みの海や公園、自宅付近、神社に出かけている。下関市内の昔の様子や景色、平家踊りをビデオで見てもらったり、平家踊りの得意な利用者が中心になって皆で踊る等の他、家族の協力を得て墓参りや通院を利用して外出、外食をするなど、馴染みの人や場所との関係が途切れないように支援に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	リビングにて皆で一緒にお茶や食事をしたり、会話やレクリエーションを行うなど、皆で一緒に楽しめるように努めている。		
23		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院で退所されたり、他施設に移られた後でも、お見舞いや電話にてその後の様子を尋ねるなどして相談しやすい関係を築いていきたい。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
24	(11)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入所時、家族からの基本情報を記入してもらい、今までの暮らしぶりや望む生活、ADL、健康状態、コミュニケーション能力についての把握に努めている。日々の入居者の言動を24時間生活変化シートに記録や申し送りのラインワークスを活用し本人の状態や意向の把握に努めている。また困難な場合は家族に相談したり、細かな声かけを行い、その思いをくみとり、入居者一人ひとりのカンファレンスを開催し検討している。	入居時には本人や家族からこれまでの暮らしの状況や趣味、習慣、好み、これから望む生活等を基本情報(センター方式シート活用)に記録して思いの把握に努め活用している。日々の関わりの中で利用者に寄り添い、発した言葉や声の変化、表情、行動、どんな時に喜んでいるかななどを「24時間生活変化シート」に記録し、申し送り時やラインワークスを活用して思いの把握に努めている。困難な場合は家族に相談したり、職員間で話し合い、本人本位に検討している。	
25		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族からの情報や本人から話を聞く等、職員間で共有し、把握に努めている。		
26		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	24時間生活変化シートに入居者一人ひとりの生活の様子を記入し、健康チェック表にバイタルや食事摂取量、排泄を記入し、朝夕の申し送り時にも一人ひとりの一日の様子を伝えている。また、生活リハビリの中でも一人ひとりの有する力を把握するように努めている。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27	(12)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人と家族の意向、主治医の意見を参考にして職員間でケアカンファレンスを行い、援助目標、援助内容を決め、介護計画を作成している。家族の面会時に意向の再確認と介護計画の説明を行っている。毎月モニタリングを行い計画の見直しをし、現状に即した介護計画を作成している。	計画作成担当者を中心に、毎月、カンファレンスを行い、本人の思いや家族の意向、主治医、訪問看護師等の意見を参考にして職員全員で話し合い、介護計画を作成している。毎月モニタリングを実施し、3か月から6か月毎に見直している。利用者の状態や家族の要望に変化があればその都度見直し、現状に即した介護計画を作成している。	
28		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子や気づきは24時間生活変化シート、健康チェック表、会社貸与のスマートフォン(ラインワークス)等を活用し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている。		
29		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	協力医療機関への受診支援や不穏時の個別の支援(外出等)本人に合わせた支援ができるように柔軟に支援している。		
30		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	開設以来、コロナウィルス感染拡大防止のため外部との交流は控えている。自治会の大掃除には参加している。		
31	(13)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	家族の同意を得て、協力医療機関をかかりつけ医としている。内科、心療内科ともに2週間に一度往診がある。協力医療機関往診の際には、利用者の心身の状態を伝えている。緊急時には電話で様子を伝え、指示を仰ぎ、必要であれば、往診に来て頂いている。他科の医療機関への受診は家族に協力して頂いている。家族が同行できない時は職員が受診の支援をしている。歯科も必要に応じて往診の依頼をしている。	本人や家族の納得を得て、協力医療機関をかかりつけ医とし、月2回の往診があり、支援している。他科受診は家族の協力を得て受診支援をしている。歯科は必要に応じて往診を依頼している。月4回、薬剤師が処方薬を持参し、与薬指導を受けている。結果は介護記録に記録して職員間で共有し、家族には電話で報告をしている。健康管理は職員(看護師を含む)が行い、週3回来訪の訪問看護師に報告している。24時間オンコール体制にあり、夜間、休日の緊急時には事業所の看護師や協力医療機関と連携して、利用者が適切な医療を受けられるように支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問看護師が週3回訪問して、バイタルサインの確認などを行っている。また、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを共有し、協力医療機関へも報告している。		
33		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院された時は面会に行き、病院関係者と情報交換し、家族と話し合い、早期退院ができるように努めている。		
34	(14)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合の対応については、契約時に家族と話をしている。	「重度化した場合に関する指針」をもとに、重度化した場合における事業所のできる対応について、契約時に家族に説明し同意を得ている。実際に重度化した場合は、早い段階から主治医が説明し、本人や家族の意向を聞いて訪問看護師等関係者で話し合い、方針を決めて共有し、医療機関や他施設への移設も含めて支援に取り組んでいる。	
35	(15)	○事故防止の取り組みや事故発生時の備え 転倒、誤薬、行方不明等を防ぐため、一人ひとりの状態に応じた事故防止に取り組むとともに、急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身につけている。	ヒヤリハットや事故報告書を記録し、職員間で事故防止策について検討後、回覧し、情報共有している。職員会議にて報告を行い、再検討して事故防止に取り組んでいる。職場内研修にて年2回応急処置方法(止血やショック状態への対応)の研修を行っている。職員3名が普通救命講習を受講した。	事例が生じた場合は事故報告書、ヒヤリハット報告書に発生状況や原因、想定される事故、改善すべきことを記録して回覧し、職員全員に周知している。月1回の職員会議時に再度検討して、一人ひとりの事故防止に努めている。消防署主催の救命救急法の講習を職員3名が受講している。内部研修で年2回、管理者による応急手当処置方法について学ぶとともに、食中毒や感染症、熱中症、脱水症状を学んでいるが、実践力を身につけるまでには至っていない。	・全職員での応急手当や初期対応の定期的訓練の継続

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回、昼、夜間を想定して消火、避難、通報訓練を行っている。	年2回、防火管理者を中心に防災設備会社の協力を得て、昼夜の火災を想定した通報訓練、避難訓練、消火器の使い方、防災機器の使い方、避難経路の確認、非常食の試食(カップ麺等)を防災業者や利用者も参加して実施している。運営推進会議の文書持参時に訓練の紹介等をしているが、運営推進会議メンバーや地域からの参加はない。災害時の非常用食品は備蓄している。	・地域との協力体制の構築
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
37	(17)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	法人全体研修や職場内研修で接遇について学び、馴れ馴れしい言葉かけや流行り言葉は使わず、入居者が聞き取りやすいように意識して話しかけている。新しく入った職員には守秘義務について説明している。個人カルテは外側から見えないように保管している。	職員は内部研修(接遇マナー、プライバシーの保護、個人情報の取り扱い)で学び、管理者の日常の指導である「フレディの遺言の学び」(要約:何事もやさしく相手の言うことを受け入れる)を通して学び、利用者一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている。個人情報は適切に管理し守秘義務は徹底している。	
38		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ティータイム時の飲み物やお菓子、食事など、本人が食べたい物を聞いている。家にいる時と同じように気兼ねなく過ごせるように本人の思いや希望を聴いている。		
39		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	1日を居室で過ごされたり、リビングでテレビ観賞や談話したり、本人の意思に添って、その人らしい生活ができるように支援している。		
40		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節に応じて、その人らしいおしゃれができるように一緒に衣類の整理整頓を行っている。必要に応じて訪問理容を利用、それを心待ちにしておられる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41	(18)	<p>○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている</p>	<p>セントラルキッチンにて管理栄養士が考えた献立の料理が毎日配達されている。ホーム内ではその温めや、汁物を調理して、入居者とともに盛り付けを行い出来立ての料理を召し上がって頂いている。本人の状態に合わせて、きざみ等の工夫をしている。ティータイム時にはおはぎ、ゼリー、ラスク、昔懐かしい駄菓子等のお菓子を用意し、喜んでいただいている。食事前のテーブル拭きや食器洗い、盛り付け等、できることをしてもらい、家事に参加していただいている。</p>	<p>食事は三食とも法人管理栄養士の献立によるセントラルキッチンからの半調理済みの配食を利用し、事業所で煮る、焼く、温める、汁物をつくる、ご飯を炊くなど、利用者が中心となって作り、提供している。食べやすいように形態(刻む、つぶす、とろみ)や盛り付けの工夫、自助具、食器等の工夫をして支援している。献立についてや好き嫌い、塩分濃度、摂取量についての情報を定期的に管理栄養士に報告している。利用者は調理(煮る、焼く、温める、混ぜる、丸める、ひっくり返す)や盛り付け、テーブルを拭く、食器を洗う、トレイを拭くなど、積極的に職員と一緒に取り組んでいる。食事中は静かなオルゴール曲を流し、利用者と職員は同じテーブルについて、食材の話をしながらかき氷やちらし寿司、たこ焼き、焼き鳥、誕生会でのケーキ、お月見会の団子、お好み焼き、郷土料理(けんちょう)づくり、梅ジュースづくりなど、食事を楽しむことができるように工夫して支援している。</p>	
42		<p>○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている</p>	<p>食事量摂取量の記録をしている。むせる方には水分にトロミをつけるなど、その方にあった食事を提供している。水分量が不足している入居者の方にはお茶ゼリーを提供している。</p>		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	本人の状態に応じて、義歯の洗浄をしている。口腔ケアの拒否をされる方には時間をおいて声かけし、自分の力で口腔ケアできない方には理解し易いように声かけし、介助している。		
44	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	排泄チェック表や24時間生活変化シートを活用して、パターンを把握し、声かけ、誘導を行っている。トイレの場所がわからずにそわそわとされている時もトイレで排泄できるように声かけ、誘導している。居室にトイレがある為、排泄のパターンが把握できないこともある。	排泄チェック表と24時間生活変化シートを活用して一人ひとりの排泄パターンを把握し、羞恥心や不安に配慮した言葉かけや誘導をして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている。紙おむつやパットを利用する場合は根拠をはっきりさせて、家族にも説明をして使用している。	
45		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	定期的にヤクルトやジョアを提供している。また運動(体操)を取り入れたレクリエーションや散歩を行っている。お茶ゼリーを提供し、なるべく薬を使わず、便秘を予防している。		
46	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	毎日14時から16時までゆっくりとあたたまることができるように入浴剤を入れ、入浴を楽しめるように工夫している。入浴したくない入居者には時間をずらしたり、職員をかえたり、言葉かけの工夫等をしている。また入浴をされない方は足浴を行っている。寝る前の入浴は難しく、希望には応えられていない。	入浴時間は14時から16時まで、温まるように入浴剤を入れた風呂に希望すれば毎日入浴できる。順番や湯加減等、本人の希望に添って、ゆったりとくつろいだ入浴になるように支援している。入浴したくない人には無理強いしないで、時間を変えたり、職員の交代、言葉かけの工夫をして対応し、少なくとも週3回は入浴できるように支援している。利用者の状態に合わせて清拭や足浴、シャワー浴等、個々に応じた入浴の支援をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	食後は入居者の半数以上の方が居室やソファで休んでおられる。室温や乾燥、物音に気をつけ、安心して気持ちよく眠れるよう、寝具類も清潔にしている。		
48		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	一人ひとりの薬の副作用は概ね理解できている。服薬後の入居者の様子はしっかり観察している。新しく薬が変わった場合や服薬後、症状に変化があった場合は主治医に相談後、ラインワークスにより職員間で共有している。		
49	(21)	○活躍できる場面づくり、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	本人の残存能力を把握し、毎日の掃除、洗濯物干し、洗濯物たたみ、調理や片づけ(茶碗洗い)など入居者一人ひとりが持っている力を活かした役割を持ち、生きがい・やりがいのある生活できるよう支援している。七夕、誕生日会、敬老会、クリスマス会、茶話会、食事のテイクアウト等の季節の行事など、楽しみごとや気分転換の支援をしている。また法人内の他ホームでの行事にも参加し、入居者同士の交流を図っている。	居室の掃除(掃く、拭く、玄関の掃除、リネン(枕カバー、シーツ)交換、布団を干す、カーテンの開閉、洗濯物(干す、たたむ、収納する)、花を生ける、花瓶の水を換える、プランターに花植え、水やり、草取り、トレイを拭く、食器を洗う、食事の盛り付け、調理(煮る、焼く、温める、ご飯を炊く、汁物をつくる)、たこ焼きづくり、ケーキづくり、かき氷づくり、礼状や年賀状を書く、テレビやDVDの視聴、本や雑誌、新聞を読む、写真集を見る、折り紙、ぬりえ、ちぎり絵、クリスマスリースづくり、歌を歌う、カラオケ、季節の壁画づくり(2月は節分のちぎり絵)、かるた、紙芝居、風船遊び、ボール遊び、輪投げ、積み木崩し、各種体操(ラジオ、テレビ、リハビリ、口腔、グーパー、歌等)、脳トレ(計算、漢字、四字熟語、間違い探し)、誕生会、季節行事(初詣、運動会、ミニ夏祭り、七夕の会、敬老の日、ハロウィンパーティー、クリスマス、忘年会)、郷土料理(けんちょう)づくり、他ホームとの交流、ビューティヘルパーの来訪、テイクアウト(ハンバーガー、回転寿司、海鮮丼、幕の内弁当、花見弁当)、ドライブなど、多くの工夫をして、利用者一人ひとりに合わせた楽しみごとや活躍できる場面づくりをして、気分転換を図り、張り合いや喜びのある日々を過ごせるように支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍で外出は控えている。近隣への散歩などで気分転換を図っている。	事業所周辺の散歩や外気浴、日光浴、ポストの利用、コンビニへの買い物に出かけている。季節の花見(桜)、プランタンに花植え(朝顔、チューリップなど)と水やり、海や公園、神社、自宅付近をドライブし、家族の協力を得て通院を利用して外出、外食など、戸外に出かけられるように支援している。	
51		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	所持金は持っておられないが、身の回りの必要な物は家族の了解を得て、立替金で購入している。		
52		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人や家族の希望があれば電話して頂いている。面会が難しい場合はラインのテレビ電話を活用して顔をみながら話をされ、年賀はがきに本人の写真を入れ、近況や名前を書いて頂いて郵送している。		
53	(23)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	リビングの壁面や廊下に入居者の季節感のある作品や行事の写真を飾り、家族が面会に来られた時も暮らしの様子がよくわかるようにしている。季節ごとに飾り物や花を飾り、季節感を感じて頂くようにしている。また、リビングのソファやテレビの配置を工夫し、動線を考えた安全な配置にし、観葉植物を置き、室温や湿度に配慮し、明るくゆったり過ごせるようにしている。台所は対面式キッチンであり、調理しながら、入居者の様子も見られ、カウンターを利用して調理のお手伝いをして頂くことができ、調理の匂いで「お腹が空いた」と言い、台所に来られる入居者の方もおられる。	リビングは木目調で整えられ、落ち着いた雰囲気がある。室内には、テーブルや椅子、ソファ、テレビ、空気清浄機等をゆったりと配置し、観葉植物(珈琲の木やハートリーフ)や季節の花を飾っている。壁面には皆で作った「節分」のちぎり絵作品が飾っており、季節を感じることができる。対面式キッチンからは調理の音や匂いがして生活感を感じることができる。キッチン前のカウンターでは利用者が食事の手伝いができるようになっている。入室時用の自動消毒器を置き、温度、湿度、換気、清潔、消毒に気配りをして、職員は全員マスクをして居心地よく過ごせるような工夫をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングのソファやテーブルにて、親しい入居者同士で会話を楽しまれている。座布団やクッション、ひざ掛けを使用し、ゆったり思い思いに過ごして頂いている。		
55	(24)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	布団、衣類、衣装ケース、仏壇、写真などを持って来られている、写真や色紙、ぬり絵を飾り、居心地よく過ごせる工夫をしている。	布団、衣類、衣装ケース、整容道具、時計、クッション、ぬいぐるみ、仏壇など、使い慣れたものや好みの物を持ち込み、家族写真や孫からの祝いの色紙、ぬりえの自作品を飾って、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	
56		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	廊下や浴室、トイレに手すりを設けている。居室は自立した生活が送れるように整理整頓や動線を考えた家具の配置を工夫している。居室入り口に大きく名前を書いたりトイレのドアにはひとりひとりに合わせ「トイレ」や「便所」と掲示している。		



## 2. 目標達成計画

事業所名 グループホーム元町

作成日: 令和 4 年 7 月 11 日

【目標達成計画】					
優先順位	項目番号	現状における問題点、課題	目標	目標達成に向けた具体的な取り組み内容	目標達成に要する期間
1	35 (1 5)	現在、事故防止の取り組みや事故発生時の備えとしてヒヤリハットや事故報告書を作成し回覧・職員会議にて再発防止策の検討をしている。また、職場内研修にて年2回の応急処置法等の研修を行っているが、全職員が完璧にこなすことができない。	全職員での応急手当や初期対応の定期的訓練の継続 普通救命講習会への参加	・事例が発生した都度再発防止検討会の実施 ・定期的な研修やOJTの実施	通年
2	36 (1 6)	災害対策として、年2回の消火・避難・通報訓練を実施しているが、地域住民の協力体制が確立されていない。	地域住民への声掛けを行い、災害時の協力体制を確立する。	自治会や運営推進会議を通じて近隣住民へ災害時の協力を依頼する。(施設の状況を理解してもらえる人を増やす)	通年
3					
4					
5					

注1) 項目番号欄には、自己評価項目の番号を記入すること。

注2) 項目数が足りない場合は、行を追加すること。